



©AFP=時事

Peter Drucker

第29回

仕事と人生に生かすドラッカーの教え

われわれは、学ぶことは
あらゆる人間に内在する
欲求であることを再認識するに
いたった。人とは学びの
存在である。

『傍観者の時代』(1994)

佐藤 等

ドラッカー学会理事

さとう・ひとし——昭和36年北海道生まれ。59年小樽商科大学商学部商業学科卒業。平成2年公認会計士試験合格。佐藤等公認会計士事務所開設。14年同大学大学院商学研究科修士課程修了。ドラッカー学会理事。編著に『実践するドラッカー』シリーズ(ダイヤモンド社)など。近著に『ドラッカー教授 組織づくりの原理原則』(日経BP)がある。

「就社」ではなく
「就職」という意識をもつ

人は何のために学ぶのか。

① 順逆を超えるために学ぶ

② 気質を変えるために学ぶ

③ 自分のいる一隅を照らすために学ぶ

学ぶ

『安岡正篤 心に残る言葉』(藤尾秀昭・著)にある三つの学ぶ理由です。

学ぶことは、働くことと無縁ではありません。それどころか知識

社会といわれる現代においては、

とびきりよすれば、土きり一隅を

照らし続けることはできません。

「二一歳までに学んだことは五年から一〇年で陳腐化し、新たな理論、技術、知識と代えるか、少なくとも磨かなければならなくなる」

『イノベーションと企業家精神』では社会の役に立ち続けるためには、何を学んだらよいのか。

働く人の労働寿命は五〇年を超え、組織の寿命が三〇年に満たないという現実、一生のうちにいくつかの組織を移りながら働き続けることを意味します。

これまでは、「就社」によって役割が与えられ、定年までそれをま

っとうすることができました。その会社や業界特有の知識やスキルを身につけておくことが最も生産的に仕事を行う秘訣でした。

しかし働く者の労働寿命の方が長い現代社会においては、就社ではなく「就職」——どんな職に就くのか——という意識をこれまで以上に強くもって働き続けることが求められます。そこが自ら照らすべき「一隅」だからです。

そのためには、他でも通用する知識やスキルはもちろん、常に環境変化を意識した新たな知識やスキルの習得も不可欠です。

コロナ禍による価値観の急速な

変化は、産業構造の変化を生み、人材の流動化につながります。た

とえば飲食店が非接触・非対面、おうち時間の充実などの価値観の

変化に対応させ、テイクアウトや通信販売専門に転換すれば、飲食

店の雇用は減り、IT産業や宅配業の雇用は増えるでしょう。

一方、たとえば自動精算機の普及のようにこれまで人が行ってきた仕事をロボットに置き換えるよ

うな動きがさらに広がることは、間違いありません。日々新しい仕

事が生まれ、他方で既存の仕事が

学ぶことは、働くことと無縁ではありません。それどころか知識社会といわれる現代においては、学び続けなければ、社会の一隅を

くつかの組織を移りながら働き続けることを意味します。これまでは、「就社」によって役割が与えられ、定年までそれをま

そのためには、他でも通用する知識やスキルはもちろん、常に環境変化を意識した新たな知識やスキルの習得も不可欠です。

た仕事をロボットに置き換えるような動きがさらに拡がることは、間違いありません。日々新しい仕事が生まれ、他方で既存の仕事が

なくなっているということです。

一途に、一心に信じた「職」に打ち込み、学び続ける。もって社会の役に立ち続けるという覚悟が一道を拓き、花を咲かせます。

失敗や挫折は 天が与えた試練

「一人ひとりの人間が、自らの継続学習、自己啓発、キャリアについて責任をもたなければならなくなる」

『イノベーションと企業家精神』
こうして発心して選んだ「職」を意識し、自らの責任において知識やスキルを学んでも徹しい現実が待ち受けています。

「知識社会では、成功が当然のこととされる。だが、全員が成功するなどということはありえない」

『明日を支配するもの』

知識社会では、仕事での失敗や挫折と隣り合わせです。その結果、正当な評価を受けず不遇のときを過ごすこともあるでしょう。しかし失敗や挫折が人を成長させるのもまた事実です。

「信用してはならないのは、決して間違いを犯したことの無い者、失敗したことのない者である。そ

のような者は、無難なこと、安全なこと、つまらないことにしか手をつけない」

『マネジメント』

ドラッカーは、無難なことしか行っていない者をリーダー的な地位につければ、成果があらわれない組織になると警鐘を鳴らします。失敗や挫折は、人の能力を高め、器を磨き、人物を本物にするために天が与えた試練です。労苦に耐え、乗り越えた者だけが真のリーダーたり得るのです。

そのために必要なものは、不断の学びです。しかしそれは、業務知識やスキルなどを習得することではありません。これらの学びは、末学です。本学と呼ばれる「人間学」を学ぶことです。人は「教え」によって人となるといえます。古今の先哲の教えを学ぶことです。社会の中で一隅を照らし続けるために学ぶべきもう一つの重要な本質的な領域です。

仕事と学びは 人生そのものである

「今日、中年の危機がよく話題になる。四五歳ともなれば、全盛期に達したことを知る。同じ種類の

ことを二〇年も続けていれば、仕事はお手のものである。学ぶべきことは残っていない。仕事に心躍ることはほとんどない」

『明日を支配するもの』

ドラッカーは、平穏な日常に潜む「順境の中にある逆境」ともいうべき状況を指摘しました。原因は、「飽きる」ことだと断じました。挑戦を避け、無難に生きることです。生じた結果ともいえます。組織が存続する限り、生活には困らないかもしれない。しかし引き換えに心躍ることのない時間を何十年も過ごすことになるのです。

ドラッカーのアドバイスを聞いてみましょう。

「スキル中心では方向転換はできません。突然行き止まりになってしまします。(中略) 外の世界から始めなさいということです。『目的は何か』『何が大事か』からスタートするということです。道具は同じものを使う。しかし、つくりあげるものは違う」

『非営利組織の経営』

目的を問うことは、「就職」によって磨いてきた知識やスキル、経験を道具として何のために使うのかを問うことと同義です。それは、

今以上に誰かの役に立ちたいという心の叫びです。

「就職」という意識を強くもつことは、広く社会に目を向けるキッカケとなり、ときにそれは、自らが蘇る機会にもなります。

「成果をあげるエグゼクティブの自己開発とは真の人格の形成でもある。それは機械的な手法から姿勢、価値、人格へ、そして作業から使命へと進むべきものである」

『経営者の条件』

成果、つまり社会における役立ちを強く意識することは、日々の機械的な作業や仕事を人格の形成の糧に変えます。そのためには、使命——目的を問うことです。

自己開発とは、学びを深め、実践することです。それは己の気質を変える自己修養のプロセスでもあります。仕事と学びは人生そのものだといえます。

最後に、森信三先生の教えを心に刻み、人生の糧にしたい。

「たとえ時代がいかに推移し展開しようとも、人は自らの職業を天より与えられたわが使命達成の手段として、これに對して、自分の全身全霊を捧げるところに人生の真の幸福は与えられる」